

# 教材論から見た「手袋を買ひに」の再検討 Review of “*Tebukuro o Kaini*” from the Viewpoint of Teaching Material Theory

上 田 信 道\*

UEDA Nobumichi

## 要 旨：

本稿では教材論の立場から、新美南吉「手袋を買ひに」について論じた。この童話のストーリー（母狐が自分でさえ恐ろしくて足がすくむような危機な町に子狐だけを行かせる）に作品構造上の〈欠陥〉があって、この点に関する国語科教育の多くの実践には〈指導〉と〈誘導〉の取り違えが見られるという問題提起を行っている。

## Abstract

From the viewpoint of the teaching material theory, this paper discusses the fairy story “*Tebukuro o Kaini*” written by Nankichi Niimi. In this story, a mother fox sends her little fox to a horribly dangerous town to buy gloves. This paper suggests that, due to a structural “defect” of this story, a confusion is seen between “teaching” and “guidance” in many sites of Japanese language education using this storybook.

キーワード：新美南吉、「手袋を買ひに」、国語科教育、文学教材

Keyword : Niimi Nankichi, “*Tebukuro o Kaini* (Going to the Town to Buy Gloves),” Japanese language education, literary teaching materials

## 1. はじめに

私は先に新美南吉の童話「手袋を買ひに」について、論考を発表している。

即ち、「新美南吉「手袋を買ひに」論—ほんとうに人間はいいものかしらという問いの意味—」<sup>1)</sup>、「新美南吉の作品における〈母〉—「手袋を買ひに」と「狐」を中心に—」<sup>2)</sup>、「三つの「狐」の物語—「ごん狐」「手袋を買ひに」「狐」の底流」<sup>3)</sup>である。ただ、これらは主として児童文学研究の視座からのアプローチであった。

もとより、児童文学研究の視座からの作品論（以下、単に「作品論」）と国語科教育の視座からの教材論（以下、単に「教材論」）とでは、その目的とするところが異なっている。作品論は文学作

品の文学的価値を究明すること、教材論は児童生徒にむけて文学教材としての価値および授業における教授の方法を論じることを目的としている。このように目的とするところは異なっている、研究過程で得られた成果は、相互に学びあい刺激を受けあうべきものであろう。ただ、ややもすれば作品論と教材論は相互に無関係のまま論じられがちである。しかし、本来はそうにあるべきものではない。そこで、本稿ではこの童話について改めて教材論からのアプローチを行ってみたい。

なお、本稿における童話の本文は、特に断りのない限り、『校定 新美南吉全集』第二巻<sup>4)</sup>に、教材としてのタイトルや本文は必要に応じて国語科の教科書に依った。

---

\*岡崎女子大学子ども教育学部

## 2. 教科書教材の改作をめぐる

国語科の教科書に掲載された新美南吉の童話とえば、「ごんぎつね」が真っ先に思い浮かぶ。この童話が国語科の教科書に初めて掲載されるのは、昭和 31（1956）年度版（大日本図書）の小学校 4 年生用教科書である。以来、南吉童話の代表作として、全社の教科書に掲載され続け、いわゆる定番教材になっている。

ただ、北吉郎の論文「小学・中学校教科書掲載新美南吉作品の変遷」<sup>5)</sup>（以下、北論文①）によれば、「ごんぎつね」は最も早く国語科の教科書に掲載された南吉童話ではない。

最も早い南吉童話は、昭和 28 年度版（東洋書籍）の中学校 1 年生用教科書に掲載された「おじいさんのランプ」である。

次いで、「手ぶくろを買いに」が、昭和 29 年度版（大阪書籍）の小学校 3 年生用教科書に掲載された。以来、途切れる期間はあるが、今日に至るまで 3 年生用の教科書に掲載され続けている。全社の教科書への掲載という点では「ごんぎつね」に劣るものの、教科書教材としての歴史は最長である。

もっとも、初期の頃は教科書にあっては、権利者に無断で改作されることがいわば〈常識〉であった。「手ぶくろを買いに」の場合もご多分にもれず、大幅な改作が行われている。

染原レイ子は『作品別文学教育実践史事典』<sup>6)</sup>で、1958（昭和 33）年度版の学校図書の教科書にこの種の多くの改作のあることを報告している。

次いで、深川明子は「実践研究の現状」<sup>7)</sup>で、さらに遡った 1955（昭和 30）年度版の学校図書（深川論文では「G 社」）の教科書に、1958（昭和 33）年度版を上回る改作のあったことを報告している。即ち、この童話では、母さん狐が「かあい坊やの手に霜焼ができてはかわいさう」だからと、子狐と町まで手袋を買いに行く。その途中で母子が町の灯を見る場面に大幅な改作があるという。

それでは、南吉の原文ではこの場面について、どのように記されているか。

「あれはお星さまぢやないのよ。」と言って、その時母さん狐の足はすくんでしまひました。

「あれは町の灯なんだよ。」

その町の灯を見た時、母さん狐は、ある時町へお友達と出かけて行つて、とんだめにあったことを思ひました。およしなさいつて云ふのもきかないで、お友達の狐が、或る家の家鴨を盗まうとしたので、お百姓に見つかつて、さんぞ追ひまくられて、命からがら逃げたことでした。

「母ちゃん何してんの、早く行かうよ。」と子供の狐がお腹の下から言ふのですが、母さん狐はどうしても足がすゝまないのでした。そこで、しかたがないので、坊やだけを一人で町まで行かせることになりました。

次に、件の学校図書版の教科書では、どのように記述されているか。

「あれは、お星さまじゃあないのよ。あれは、町のあかりなんだよ。」

と、かあさんぎつねは答えましたが、その時、ふと、こんなことを考えました。

「ほうやを、ひとりで買いにやってみよう。早く、自分で何でもできるようにしなくては。」

そこで、子ぎつねに向って言いました。

「ね、ほうや。ほうやも早く、ひとりで買い物ができるようにならなくては。だから、きょうはひとりで町まで行ってごらん。気をつけてね。さあ、それじゃ、おててをかた方お出し。」

ふたつの文章のあまりの違いには、ただ驚くほかない。

何よりも、当時の国語科教科書の編纂者には、原文を尊重しようとする意思は全くといってよいほど見られない。かかる改作が〈同一性保持権〉の侵害にあたることは言うまでもないが、それ以上に改作された内容があまりにも酷い。深川論文では、この点について「作品の持ち味を壊してしまうこのような低級な改作がまかり通っていた」と、厳しく批判している。また、北論文①では「教育的配慮」による内容の書き替えの典型的な一例といえようか。要するに、母親自身の過失による恐怖体験から足がすくんでいることを隠蔽し、自主性を育むために子ぎつねをひとりで町へやると

いう設定にすり替えている」と、批判している。

こうした改作への批判については、私もまた同意見である。ただ、ここでは〈教科書編纂者の意図〉に目を向けてみたい。即ち、なぜ教科書編纂者はこのように〈低級〉な改作を思いついたのだろうか、ということについてである。

おそらく、教科書編纂者は、母狐が自分でさえ恐ろしくて足がすくむような危機な町に子狐だけを行かせる、というストーリーには無理がある。この場面についてどうしても説明がつかない、と考えたのであろう。つまり、こうした改作の理由は、危険な町に子狐だけを行かせることについて、児童生徒たちが疑問に思うことに危惧を抱いたからに他ならない。

してみると、教科書編纂者はこの童話を教科書に掲載するにあたって、原作には〈欠陥〉があると判断した。そして、そのことを弥縫するために改作を行った、と考えることが順当だろう。

### 3. 西郷竹彦の問題提起—矛盾をはらむ母親像—

児童文学研究者の佐藤通雅は、研究書『新美南吉童話論 自己放棄者の到達』<sup>8)</sup>で、「手袋を買ひに」について次のように述べている。

「てぶくろを買ひに」の評価はかなり高い。教科書・ラジオなどにも何度が登場している。しかし私自身の個人的見解をいうなら、すぐれた表現を見せているにもかかわらず、素直な気持ちで読み終えることはできない。人間が恐ろしくて足が進まなくなったというのに、子ぎつねを町にやったという母親が私にはいかにも不可解である。「かあさんぎつねは、ほうやの帰ってくるのを、いまかいまかと、ふるえながらまっていましたので、ほうやがくると、あたたかいむねにだきしめてなきたいほどよろこびました。」というほどだから、たいへんな冒険をしているわけだ。それほどのことをあえて子ぎつねにやらせるというのはどうしてなのか。童話に登場する母親としては（悪役としての母親ならいざしらず）失格ではないのか。このぬぐいがたい不可解さがあるため、「てぶくろを買ひに」を無条件には認めることができない。

このように、作家論並びに作品論の立場からからは、以前から母狐が子狐だけを町へ行かせることに〈不可解さ〉を感じ、「ストーリーの強引さ」<sup>9)</sup>を〈欠陥〉としてきたのである。これ以降も先述した拙著のほか、「南吉は、この童話に愛着を持ちつつ、理想の母親像にこだわり続け、発表をためらったのだと思われてならない」<sup>10)</sup>「代表作即名作と評価してもいいものであろうか」<sup>11)</sup>と、佐藤論文に同調する動きは続く。けれども、こうした問題提起は教材論とはほぼ関わりを持たないまま、今日にまで至っている。

しかし、教材論の立場に大きな衝撃を与えた作品論がある。それが西郷竹彦『『てぶくろを買ひに』論—矛盾をはらむ母親像—』<sup>12)</sup>である。

次にその主要部分を引用紹介する。

読者である子どもたちにとって、不可解なのは、人間が〈ほんとうにおそろしいもの〉であり、〈どうしても足がすすまない〉のなら〈しかたがない〉から、〈ほうやだけをひとりで町までいかせる〉のではなく、たかが手袋ぐらい、断念すればいいのではないか。自分自身、〈足はすくんで〉一歩もすすめないほどの危険な場所になぜ、かわいい子狐を〈ひとりで町までいかせることに〉したのか。〈しかたがないので〉というが、なぜ〈しかたがない〉のか、というわけである。

西郷論文の発表は、初期の学校図書版の教科書で大幅な改作があったから、20年以上たった後のことである。この頃には、教科書掲載にあたって無断改作する行為はすっかり影を潜めていた。にもかかわらず、この童話が教科書に掲載されはじめた当初に教科書編纂者が危惧していた〈欠陥〉が実践の場で顕在化することはなく、教科書編纂者たちの危惧は杞憂に終わったかのようであった。

だが、西郷論文が公にされた当時、作品論や教材論を論じようとする者や国語教育に携わる実践家（教師）たちに与えた衝撃は極めて大きかった。個人的なことで恐縮だが、西郷論文のこの指摘が、まだ研究者としての一歩さえ踏み出していない私に、作品論や作家論など南吉研究への道を開くきっかけを与えてくれたのも事実である。

それでは、西郷論文が教材論に大きな影響を与



えたのはなぜか。それは、筆者の西郷は文芸学者であるとともに、文学教育の研究者であり、文芸教育研究協議会（略称「文芸研」）の会長を務めていたからである。かくして、「文芸研」のみならず、広く国語科教育の実践家や研究者にまで影響が及ぶことになった。

ところで、西郷論文ではこの童話に〈欠陥〉のあることを指摘したが、教材としての価値を全面的に否定してわけではない。

私は南吉を高く評価している者の一人であり、この「てぶくろを買いに」も好きな作品である。にもかかわらず、いや、だからこそといったらいいか、私は、南吉の矛盾をはらむ母親像がここに裂け目を露呈していることを惜しむのだ。

あえて付言すれば、それでも私は、この作品を愛しているし、また、子どもたちに読ませることを辞さない。それは、たとえキズがあっても玉は依然玉だからである。

しかし、実践家たちにとって〈キズがあっても玉は依然玉〉という論理を受け入れることは困難であった。とにもかくにも、教科書を通して全国の実践家たちが教室で懸命に取り組んでいる教材である。むろん、懸命に取り組んでいるからといって、教材に〈欠陥〉がないということにはならない。しかし、気持ちの上では、懸命な取り組みの対象である教材に〈欠陥〉があることを〈認めたくない〉というベクトルがどうしても働く。

かくして、〈キズではない〉という読みを成立させるために、実践家たちの〈苦闘〉が始まったのである。

#### 4. 実践の場では何が〈克服〉されたか

北吉郎は『「手袋を買ひに」研究・実践史—「天使」と「悪魔」の矛盾はらむ母親像（西郷竹彦論文）をめぐる—』<sup>13)</sup>と題する論文（以下、北論文②）で、西郷論文を次のように批判している。

しかし、子どもの読みに関してこのような問題を孕んでいるかのような断定的な書き方は、数多くの実践記録を読むかぎり首肯しかねる。（少なくとも、「つまりいてしまう」よ

うなことはなさそうである）。つまり、（作品構造がそうになっているために）当然のことながら子どもたちの中には、母狐が子狐を一人で行かせたことに対して疑問や批判を投げかけることはある。だが、そのことは指導者の側も先刻承知のことであり、再び作品に戻ってよく読めば（読み深めれば）、（作品もまたそうになっているので）ほとんどの子どもがこの疑問に対しては解消していく。

このように、児童生徒たちが疑問や批判を投げかけるのは〈作品構造がそうになっているため〉だと説明される。

しかし、児童生徒たちが疑問や批判を投げかけるような〈作品構造〉になっているならば、それは作品構造自体に〈欠陥〉があると考えべきだろう。にもかかわらず、北がそのような〈作品構造〉になっていることを教材の〈欠陥〉でないと断じる理由が、私にはわからない。

また、同じ北論文②の中で「実践家は本教材と格闘するなかで、この場面が何ら障害のない箇所であることを作品を読み深めることで克服してきている」と述べている。だが、実践家が教材と〈格闘〉しなければならぬとすれば、やはり教材に何等かの〈欠陥〉がある、と考えることが自然ではないか。それをあたかも、この童話が完全無欠な教材であるかのように評する理由についても、私にはわからない。

なによりも、児童生徒たちの〈表層的な読み〉を深めさせるため、実践家たちに〈格闘〉することを求めている。実践家たちにとってさえ困難が伴うとするならば、小学校3年生の児童生徒たちにとって、この童話はあまりにも難解な教材だということになってしまう。これでは、小学校3年生むけの教材としては相応しくない、という結論になりかねない。

それでは、北の求める〈格闘〉とはどういうことか。

ここでは、まず、北論文②で〈本作品の実践研究史における最大の功労者の一人〉と賞賛されている秋本政保の論考「まず教師がかわる—かくれている問いの発見—」<sup>14)</sup>について検討する。

子どもがうっかり読みすごすかも知れない所として、母ぎつねが子ぎつねをひとりで町

まで行かせる決心をした場面と、終わりの部分で、母ぎつねのつぶやきの場面の二か所が考えられる—中略—まず、母ぎつねの決心した場面について。わたし自身はじめは読みすごした場所なのだが、次に読んだ時「母ぎつねは、おとなである自分でもこわいの、なぜ子どもひとりに町まで行かそうとしたのか」と疑問を持った。しかし、すぐこれはきびしい愛情のあらわれだと常識的に解釈してしまった。だが胸のつかえがおりないみたいなので、近くの文章をしらみつぶしに読んでいたら、「しかたがないので、ほうやだけをひとりで町までいかせることになりました。」という文章があり、「なりました」が大事な鍵になる言葉だとわかった。「町までいかせることにしました。」ではないのだ。手ぶくろは買ってやりたいけど自分は人間がこわくて足がすくんでしまっている。子ぎつねはせかしただろう。しかたなしにわけを話したら、子ぎつねはひとりでいけるよとでも言ったのかも知れない。とにかく、迷いに迷った末に出した結論なのだ。こう考えた時に、買い方をていねいすぎるほどていねいに教えたり、同じことをくり返し言っているわけもわかる。また、子ぎつねが帰ってきた時、手ぶくろのことより、無事であったことを喜んだわけもわかる。

これが秋本論文中で「手袋を買ひに」に論及した箇所のはほぼ総てである。北論文②では、これを《「しかたがないので、坊やだけを一人で町まで行かせることになりました。」に着目した読みの発見》と称賛して止まない。

しかし、童話中の〈～にりました〉という記述からこれだけのことを読み取るためには、かなりの想像力を働かさなければならない。秋本論文が他者の論考を批判的に読む訓練を受けた成人を対象にしたものならば、秋本の読みに賛成を得ることは困難であろう。それは秋本の読みは根拠を示すことなく、結論のみが記しているからだ。だが、批判力の乏しい小学校3年生を対象にすれば、秋本の読みに納得させることは容易であろう。まだ十分に批判的な力の備わっていない児童生徒たちが、ベテランの指導者（実践家）の巧みな〈誘導〉に従わず、自分の意見を貫き通すことは殆ど不可

能だからだ。

次に、北論文②が賞賛してやまない論考は、石川一成の論考「新美南吉の青春—「手ぶくろを買ひに」をめぐって—」<sup>15)</sup>である。一見すると文学研究に於ける作家論的な論考であるかのようなタイトルだ。けれども、著者の肩書きは「神奈川県教育センター指導課」であり、同センターのゼミナールの席上での講義などがもとになっている。したがって、あくまでも国語科教育の範疇に属する論考である。

さて、石川論文では〈何故に危険な町に子狐だけを行かせたのか〉という疑問について、次のように記述されている。

未来を孕む子狐を、畏怖に充ちた、しかし、美しい人間の住む街に行かせるのは、かえって母親の愛情なのではないか。読者はともかく、南吉はかく考えてこの一編を書いたのではないか。

独特の凝った文体で記述されているためかなり分かりにくい、要するに〈獅子の谷落とし〉とばかり子狐に一種の試練を与えたのだ、とする解釈である。そのうえで、「南吉にとって母親とはやさしく待つものの謂である。いかなる危険をはらむ世界への旅であろうと、それを拘束することなく、やさしく送り出し、待ってくれる母親が、最高の存在ではなかったか」と、自説が展開される。

しかも、〈獅子の谷落とし〉という意味での「母親の愛情」を童話中に描かなかった理由は、「二十歳の南吉の筆力の不足」のせいなのだ、という。だが、これでは南吉の童話中に自説の根拠が見当たらないのは南吉の未熟さに責任がある、と主張するに等しい。こうして、石川論文では、自説の根拠を何ら示さないまま、強引に教材解釈を行っていく。そのうえで、「さっそうたる子狐の人間によせる信頼の姿を読みとることが、いちばん肝要なことなのである」「人々は無意識の中に、このけなげな子狐を母親以上に愛していた、だから、長い間、読み継がれてきたのだと考える」とされる。

これについて、北論文②では《「行かせることになりました」と表現されたのは、「母ぎつねの決断の前に、子ぎつねと母ぎつねの話し合いが

あったのではないか。その二人の話し合いの結果、子ぎつねを一人で町まで行かせることになったのではないだろうか」と概括される。そして《この解釈は、一九七二年の秋本論文（中略）をさらに一步深めた解釈を行っており、ここに「坊やだけを一人で町まで行かせることになりました」をめぐる問題は、実践の場ではほぼ克服された形になっている》と結論づけられている。こうして、北論文②に従えば「決して、この部分が作品の欠陥であったり、そのために避けて通ったほうがよい箇所などではない」「手応えのある文学教材として実践されている」のだという。

そして、実はそうした作品構造の〈欠陥〉に取って授業時間の多くを割くことが読みを深めることにつながるかのように断じられている。けれども、実はそのような実践の在り方にこそ、国語教育のありかたに関わる誤った〈指導〉のあり方が見え隠れしているのではないだろうか。

## 5. 読みの〈指導〉と〈誘導〉の取り違い

吹上善蔵は『「手ぶくろを買いに」の読み方指導』<sup>16)</sup>で、童話の中の〈仕方がないので〉に着目して次のように記している。

（仕方がないので）は、二つの見方ができそうです。

- ①自分も行くべきなのに行けないので、仕方なく一人で行かせる
- ②あきらめて引き返そうとするのに「行くんだ行くんだ」とあまり言い張るので、仕方なく一人で行かせる

ここに一人でも行くと言い張った記述はありませんが、母ぎつねは言い張る子ぎつねに負けて、一人で行くことを許したと読んでいいと思います。文末が（行かせることになりました。）となっていますが、①の場合なら文末は“行かせることにしました”とすべきです。しかし②なら、“行かせることになりました”で母ぎつねの気が進まない心情が伝わると思うからです。

ここで注目すべきことは、「母ぎつねは言い張る子ぎつねに負けて、一人で行くことを許したと読んでいいと思います」の部分である。その判断

の根拠はというと、驚いたことに「言い張った記述はありません」とある。このように根拠のないことを堂々と認めながら、自らの推測を開陳している。授業の指導者が〈子狐が言い張った〉と思う根拠を示さないままに、児童生徒たちに〈子狐が言い張った〉という〈指導〉をする。これでは読みの〈指導〉とはいえず、読みの〈誘導〉と言わざるをえない。まして、この著作の編者が〈科学的「読み」〉を標榜するならば、根拠に基づいた読解の〈指導〉をすべきであった。

山口昭男「子どもたちと一人勉強に取り組んで」<sup>17)</sup>は指導者の想像力を縦横無尽に駆使した教材論である。

教材文は、「そこで、仕方がないので、ぼうやだけを一人で町まで行かせることになりました。」となっている。私は、最初この文をなにげなく読んでいた。ところがある所で「この文は、『行かせることにしました』ではなく、『行かせることになりました』と書いてあるね」と示唆された。なるほど、言われてみれば、母ぎつねの決断なのだから「しました」となるのが自然である。ところが、教材文の方は「になりました」になっているのである。

「になりました」と表現されたのは、母ぎつねの決断の前に、子ぎつねと母ぎつねの話し合いがあったのではないか。その二人の話し合いの結果、子ぎつねを一人で町まで行かせることになったのではないだろうか。子ぎつねは、幾度となく「町へ行って、手ぶくろを買いたい」と主張したであろうし、母ぎつねは、いろいろな理由をつけて、子ぎつねをあきらめさせようとしたに違いない。それでもどうしてもあきらめないで、町へ行って手ぶくろを買うことにしたのである。

山口論文では〈～になりました〉について以上のように解釈している。けれども、例によってそうした解釈の根拠となるべき本文中の記述に関する指摘は、一切見当たらない。それどころか、山口論文では「母ぎつねの心の葛藤や教材文には書かれていない親子の会話の結果子ぎつね一人で町まで行かせることにしたことなど読みとっていくことは困難だと思える」と述べられているほどである。繰り返すが、指導者が想像力を駆使して創り



あげた解釈に児童生徒を〈誘導〉する行為を〈読解指導〉とはいえない。児童生徒たちの読み取りが困難であるならば、指導者が彼等をそうした読み取りに〈誘導〉することを断念すべきなのである。

これまで紹介してきたように、〈～になりました〉の記述に過剰な反応をしてまで合理的な説明をつけようとする。指導者の教材解釈には、かなりの無理がある。〈誤読〉とまでは断じ切れないかもしれない。だが、かかる指導者の読みを元に児童生徒たちを〈誘導〉することには、どうしても納得がいかない。

時には、指導者の浅い読みまたは誤読を超えて、児童生徒たちの方が深い読みや正しい読みをすることがある。この時、指導者が読解の〈指導〉の名の下に自らの浅い読みや誤読自らの浅い読みを児童生徒たちに押しつけてしまいがちである。それは指導者の傲慢である。指導者は児童生徒の読みに謙虚な姿勢で臨むべきだ。児童生徒の成長の芽を摘み取ってしまうことがあってはならない。

岩谷啓子の著書『手ぶくろを買いにの授業』<sup>18)</sup>は、こうした指導者の〈誘導〉の実態を見事に記録している。

教師 きのう、みんながいろいろ調べた母さんぎつねと子ぎつねのことだけど、そんなにかわいくて、かわいくてたまらない子ぎつねを、あのやさしい母ぎつねが、どうしてひとりで町へやったのか、そこを読んでいこうね。

孝君は、はじめの感想に、お母さんのこと、「いやな母さん、ざんこく」って書いてたけど、今もそう思う？

子どもたち すこしちがうと思う。

教師 祐一君も、「どうして子ぎつねだけ行かせるのか」って書いていたっけね。

みんなの考えは、きょう、どう変わるのかな。楽しみだなあ。

担任の教師に面と向かって「今もそう思う？」「みんなの考えは、きょう、どう変わるのかな。楽しみだなあ。」などと言われて、〈今でもそう思う〉〈考えは変わらない〉と言い張れる児童生徒はまずあるまい。

## 6. 「仕方がないので」に着目した読み

甲斐睦朗は「手ぶくろを買いに」の表現 キーワードに着目して<sup>19)</sup>で、次のように述べている。

〈そこで、仕方がないので、ほうやだけを一人で町まで行かせることになりました。〉

この一文もきちんと理解できるようにしたい。十分に理解しておかないと主題把握にゆがみが生じるからである。母さんぎつねは足が全然動かなくなったので、子ぎつねにもう手ぶくろをかうのはやめて帰ろうなどと提案してみたが、子ぎつねはいうことを聞かない。それどころか、母さんが行けないのなら自分一人で行くなどと言い出す。母さんぎつねとしては、町へ行くことに恐れを抱いているわけではないが、足が動かないのでしかたがない。それで、いろいろと話し合った結果、一人で町へ行かせる結論になったのである。

ところで、子ぎつねの呼び名が「ほうや」になっていることに注意したい。母さんぎつねの切々とした愛情がこめられた呼称ということができる。母さんぎつねは、短絡的に「ではお前一人で行きなさい」などと冷たく行かせたのではない。「ほうやだけを一人で町まで行かせることになりました。」から無責任な、愛情に乏しい母親像を読み取る解釈もあるが、間違っている。この母さんはいろいろと思案し、子どもの安全を十分に計算した上で初めて町まで行かせることにしたのである。

この甲斐論文について、北論文②では「これまでの作品論、教材研究、授業実践報告をふまえたみごとな総括」「ここに初めて、「手ぶくろを買いに」という美しい作品が親子の狐の愛情物語として把握される解釈がはっきり宣言されることになる」と絶賛している。北論文②にいう〈これまでの作品論、教材研究、授業実践報告〉とは、無論〈～になりました〉に着目した教材解釈を指す。したがって、この論考を〈～になりました〉に着目した読みの〈総括〉として位置づけていることがわかる。

ところが、安藤重和は「新美南吉作「手袋を買ひに」の重層構造」<sup>20)</sup>で、甲斐論文について北論文②とは異なる読みをしている。

「……母さん狐はどうしても足がすゝまないのでした。そこで、しかたがないので、坊やだけを一人で町まで行かせることになりました。」と文章は展開するが、この部分の「しかたがないので」に注目して、「母さんぎつねは足が全然動かなくなったので、ぎつねにもう手袋を買うのはやめて帰ろうなどと提案してみたが、ぎつねはいうことを聞かない。それどころか、母さんが行けないのなら自分一人で行くなどと言い出し、母狐は「しかた」なくそれを許したのだ、と読み取る説がある。だが、私には理解できない。というのは、「そこで」という語が、直前部「どうしても足がすゝまないのでした」を受けて用いられているからで、この部分の意味は、「どうしても足がすゝまないので、しかたがないので」となる。つまり、「坊やだけを一人で町まで行かせることにな」ったのは、母狐の足が母狐の意志に反して「どうしても」「すゝまなかった」からという物理的原因によるのであり、決して、「もう手袋を買うのはやめて帰ろうになどという考えが母狐の頭の中に浮かんでいるわけではないのであろう。「かあいい坊や」に手袋を買ってやりたいという母狐の一途な思いは、自分の足がすゝまなくて動かなくなってもなお持続され、遂に「坊やだけを一人で町まで」手袋買いに行かせることになった。「かあいい坊や」の為に手袋を買ってやること自体が目的化され至生命題となって、母狐を圧さえつけている。

ここで注目したいのは、この場面は〈～になりました〉ではなく〈しかたがないので～〉に着目すべきだ、と安藤が解釈していることだ。即ち、安藤の解釈では〈どうしても足がすゝまないので、しかたがないので〉子狐だけを町へやった、ということになる。なるほど、このように〈しかたがないので～〉に着目してしまえば〈ぎつねにもう手ぶくろを買うのはやめて帰ろう〉云々などと、根拠のない無理な読みを重ねる必要はなくなるわけである。

そもそも、〈～になりました〉に着目した教材論や実践記録は、童話中の一部の語句を文章表現全体から切り離し、そこから童話全体を読解しようとしたところに無理が生じているように思う。

安藤論文の如く、少なくとも「そこで、しかたがないので、坊やだけを一人で町まで行かせることになりました」の一文全体、を考察の対象とすべきであろう。

また、甲斐論文には、〈～になりました〉に着目すると明記した部分はない。したがって、北論文②のようにこの論文を〈～になりました〉に着目した〈読みの発見〉を〈総括〉したと断じることには、疑問を抱かざるを得ない。

なお、甲斐論文について付言すると、母狐は果たして甲斐が解釈するように子狐の安全を〈十分に計算した〉とまで言えるだろうか。如何なる策を施そうとも、子狐だけを町まで行かせるのは危険すぎる。昔はさんざ追いかけられ、自分も命からがら人間の手から逃れたのである。町がそのような危険な場所であるなら、たとえ自分がついて行ったとしても、〈安全〉とはいえないはずである。

## 7. 終わりに

以上見てきたように、〈～になりました〉に着目した解釈には、どこかに〈教科書教材にキズなどあってはならない〉という思い込みがあるように思えてならない。仮に教科書教材にキズがないとする。ならば、必然的に〈指導者や児童生徒たちの読みが浅いかまたは誤っている〉という結論になる。ここから指導者＝実践家たちの〈苦闘〉が始まった。これは、児童生徒たちにとって大変不幸なことであつた。

そもそも、完全無欠の文学作品といえるものは存在し得るか。また、存在したとしても、そうした教材だけで国語科の教科書を編纂することは不可能ではないだろうか。

西郷竹彦は「西郷先生に聞く「手ぶくろを買いに」をどう扱うか」<sup>21)</sup>で、問題となる場面の取り上げ方について、次のように述べている。

それをふまえて、その場面をどうするかというと、極端に言うと、素通りしたいところなんです。しかし、それもできない。子供の方から疑問が出るかもしれない。そうするとお母さんの矛盾として扱う以外にないですね。これが、中学・高校であれば、作家論をもちこんで、作品の中に破たんをひき起こすことがあるということで教材化することでも



きますね。

小学三年生の段階でそれを言ってもわかることでないし、「このお母さんは、よっぽどこわかったんだろう。」「よっぽど子どもに手ぶくろを与えたかったんだろう」そういう矛盾をもってきてああいうふうになったんだろう。出してやったあと、どんなにかせつなくて、帰りを待っていたんだろう。だからあんな、〈こごえるような〉〈ふるえながら〉となったんだろうね、という理解のしかたをすればいいと思う。そこが、ある意味では、やっかいなところです。人物の矛盾なら納得が行くのですが、作品の矛盾だから転化できないのです。ここにややこしさがありますが、教材として扱うとき、そんなところはとり上げないということも大切でしょう。

なお、「中学・高校であれば…」云々について。こういう所に、教材論と作品論の違いがあらわれている。教材論の立場では、「手袋を買ひに」は小学校3年生に教えることを前提にしなければならないのである。

また、もし児童生徒たちがこの場書に引っかかってしまったならば、〈なるほど母狐の考え方はまちがっているね〉〈みんなのお母さんならそんなことはしないね〉と、往なす指導で、児童生徒を迷路に踏み込ませないことも可能なのではないだろうか。

以上のように、国語科教育の視座から「手袋を買ひに」にアプローチしてみた。しかし、問題はまだ残されている。国語科教育の実践の場でよく問題にされるのは〈母狐はなぜ長靴ではなく手袋を買ひに町へでかけたのか〉〈母狐はなぜ片方の手だけを人間の手に変えたのか〉〈子狐の正体を見抜きながら手袋を売ってやった帽子屋さんは親切なのか〉〈子狐に教えられて母狐の人間観は変わったのか〉などである。こうした問題については稿を改めて論じたい。

#### 引用・参考文献

- 1) 「国際児童文学館紀要」1986年12月 大阪国際児童文学館
- 2) 「本とこども 特別版3」1993年6月 本とこどもの会
- 3) 「新美南吉記念館研究紀要」2009年3月

新美南吉記念館

- 4) 『校定 新美南吉全集』第二巻1980年6月 大日本図書
- 5) 西郷竹彦責任編集「文芸教育」59 臨時増刊（「新美南吉を授業する」）1992年2月 明治図書
- 6) 浜本純一・森田信義・東和男 編 1983年9月 明治図書
- 7) 大河内義推『「手袋を買ひに」の全発問・全指示』の「解説」1987年2月 明治図書
- 8) 佐藤通雅『新美南吉童話論 自己放棄者の到達』1980年9月 アリス館
- 9) 註7) に同じ
- 10) 小野敬子『南吉童話の散歩道』1992年7月 中日出版社
- 11) 赤座憲久『再考新美南吉』1993年4月 エフエー出版
- 12) 日本児童文学者協会編『新美南吉童話の世界』1976年7月 ほるぷ（「日本児童文学」別冊）
- 13) 「国語科教育」第42集 1995年3月 全国大学国語教育学会
- 14) 「国語の教育」46号 1972年2月 国土社
- 15) 「月刊国語教育研究」67号 1977年11月 日本国語教育学会
- 16) 科学的「読み」の授業研究会編「教材研究の定説化」27 『「手ぶくろを買ひに」の読み方指導』1996年6月 明治図書
- 17) 国語教育を学ぶ会編「研究シリーズ・授業をつくる」4 『一人ひとりを生かす個人学習』1983年9月 明治図書
- 18) 「文学の読み方指導」1 岩谷啓子『手ぶくろを買ひにの授業』1988年8月 桐書房
- 19) 全国国語教育実践研究会編「実践国語研究別冊」79号 1988年6月 明治図書
- 20) 「国語国文学報」第48集 1990年 愛知教育大学国語国文学研究室
- 21) 西郷竹彦責任編集／文芸研編「文芸研教材研究ハンドブック」5 伊佐・出水文芸研著『新美南吉＝手ぶくろを買ひに』1985年2月 明治図書